

研究フィードバック

2018年1月30日

研究課題名：アンカリング・ビネット法によるパーソナリティ特性の検討

調査および実験：パーソナリティに関する質問紙

責任者：専修大学文学研究科 心理学専攻 博士課程2年 柚取恵太

共同研究者：専修大学文学研究科 心理学専攻 二瓶正登・北條大樹

指導教員：専修大学人間科学部 国里愛彦 准教授 ([ykunisato\[at\]psy.senshu-u.ac.jp](mailto:ykunisato[at]psy.senshu-u.ac.jp))

調査内容：フェイスシート(年齢・性別)、不確実さ不耐性尺度(13項目)およびそのビネット項目(39項目)に回答してもらう。

この度は、調査に参加して頂きありがとうございました。皆様のご協力により、無事研究を行うことができました。心から感謝申し上げます。分析結果に関しては以下に示します。

回答データの記述統計

全回答者：315人

有効回答者：300人(男114人, 女性182人, その他4人)

平均年齢：19.18歳(SD=1.03)

不確実さ不耐性尺度全項目と下位尺度の平均得点と標準偏差(SD)

※不確実さ不耐性尺度は2つの下位尺度(各6項目)で構成される。

	全体平均(SD)	男性平均(SD)	女性平均(SD)
不確実さ不耐性尺度(1-12項目)	33.7(7.6)	34.0(7.7)	33.6(7.6)
Prospective Anxiety(1-6項目)	17.7(3.8)	18.1(3.9)	17.5(3.7)
Inhibitory Anxiety(7-12項目)	15.9(4.5)	15.9(4.6)	16.0(4.5)

男女間の尺度得点に統計学的な差があるか?

Mann-Whitney 検定を実施した結果、全項目および下位尺度において性別による統計学的な差はありませんでした。

因子構造の検討

今回収集した不確実さ不耐性尺度が先行研究(竹林・笹川・杉浦・坂野, 2012)と同様に2因子構造となるかを探索的因子分析および確認的因子分析で検討した。その結果、下位尺度から成る2因子構造であることが判明した。

確証的因子分析での1因子モデルと2因子モデルの比較

規準	1因子モデル	2因子モデル
GFI	0.86	0.87
AGFI	0.79	0.81
CFI	0.84	0.85
RMSEA	0.11	0.10
AIC	9508.04	9491.03
BIC	9596.93	9583.62

信頼性の検討

不確実さ不耐性尺度およびその下位尺度の信頼性について検討するために α 係数を算出した。その結果、先行研究同様の内的整合性を持っていることが判明した。

	不確実さ不耐性尺度	Prospective Anxiety	Inhibitory Anxiety
α 係数	0.87	0.65	0.83

ビネット項目を用いた回答者の反応スタイルの統制

質問紙調査の項目回答には、回答者の個人特性（不確実さ不耐性の程度）とは別に、回答者の反応スタイル（回答者特有の回答時の“癖”のようなもの）も反映される。これを仮想人物に関する記述で構成されるビネット項目を導入することで反応スタイルを統制し、より正確な回答者の個人特性の解釈を行うのが係留ビネット法とその分析モデルである。

本研究ではこれを実施し、不確実さ不耐性尺度にかかる回答者の反応スタイルを測定、そして、統制を実施した。まず、本研究の調査データに関して、反応スタイルを統制する必要があるか否かについてを、情報量規準の観点から明らかにした。ここでは、その結果を示す。

情報量規準	統制モデル	非統制モデル
WAIC (SE)	-1347.6 (5.6)	-1241.1 (5.6)
PSIS-LOO (SE)	-1347.6 (5.6)	-1241.1 (5.6)

※どちらの値も小さいほど予測の観点から良いモデルであることを示す。

結果として、反応スタイル統制モデルが反応スタイル非統制モデルよりも将来データの予測の観点から良いモデルであることが示された。つまり、本研究の調査データに対して反応スタイルの統制を行うことが重要であると考えられる。

参考文献

竹林由武, 笹川智子, 杉浦義典, & 坂野雄二. (2012). The Short Intolerance of Uncertainty Scale 日本語版の開発. 認知療法研究 = *Japanese journal of cognitive therapy*, 5(2), 179-187.